

# 英語への興味・関心を高め、 コミュニケーション力を育む授業デザイン

熊倉 了子（教育実践コース）

## 1 課題意識

実習校で6月と10月に行われる学習アンケートの結果を見ると、「英語の授業は好きです。」の問いに対して「あてはまる」と回答した生徒の割合は、6月より10月が、また、学年が上がるにつれて下がる傾向が見られる。生徒が必要な学力を身に付けるためには、学習意欲が大切な前提条件になる。そう考えると、学習内容が難しくなることを理解しても、この結果は改善したい課題である。

また、平成29年に告示された中学校学習指導要領解説外国語編（以下、新学習指導要領と記す。）には、実際のコミュニケーションを意識した活動を行い、英語でコミュニケーションできる生徒の育成が求められている。

上述した実習校の実態と新学習指導要領で育成を求められている力を総合的に捉え、研究テーマを「英語への興味・関心を高め、コミュニケーション力を育む授業デザイン」とした。

英語は学力差のある教科である。筆者は、人数の多い中間層であるNRT<sup>1</sup>3の生徒や、それより少し英語を苦手とするNRT2の生徒の力を高めることが全体のコミュニケーション力の向上につながると考え、手立てを講じる。

## 2 研究の全体像

(1) 本研究におけるコミュニケーション力の定義  
本研究における「コミュニケーション力」を「コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、相手に十分配慮しながら、適切な言語材料を活用し、意思疎通を行うこと。」と定義する。

### (2) 研究の全体像

コミュニケーション力を高めるためには、学習意欲が大切な前提条件になる。筆者は、英語への興味・関心を高める中で、「実際のコミュニケーションを意識した活動」を行い、コミュニ

ケーション力を高める授業デザインを考えた（図1）。

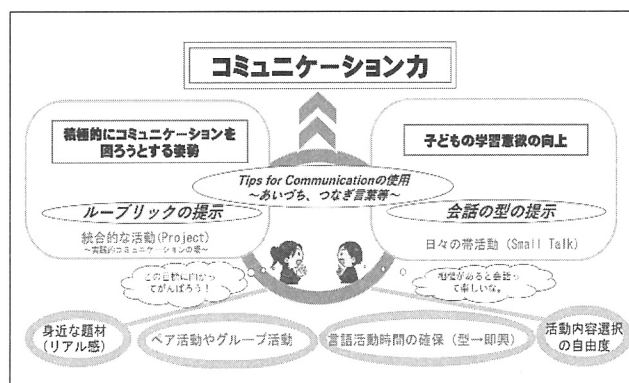


図1 英語への興味・関心を高め、コミュニケーション力を育む授業デザイン

日々の授業の中で、生徒の英語への興味・関心を高める土台として、1年時に四つの授業改善ポイントを手立てとして導出した。それらは、「身近な題材（リアル感）」「活動内容選択の自由度」「ペア活動やグループ活動を通した学びに向かう力、学び合い」「言語活動時間の確保」である。

また、一次的な興味・関心ではなく、学習意欲の継続につなげるためには、英語を活用する場面設定も大切である。そこで、「日々の帯活動（Small Talk）」と「統合的な活動（Project）」の言語活動を授業デザインの中心に位置付けた。「Small Talk」は、提示されたトピックについてペアで1分間会話を行う活動である。既習事項を自由に活用して表現する言語活動時間の確保になる。また、統合的な活動として行う「Project」は、より実践的に、既習事項を使った英語の表現、コミュニケーションに挑戦する場である。実際のコミュニケーションに近い場面で英語の使用を経験することで、活用する力の育成を意図する。これら二つの活動を往還し、生徒自ら、力が付いたことを確認し、英語を活用することに面白さを感じ、自分からやろうとする姿勢を育む手立てとして授業をデザインした。

<sup>1</sup> NRTとは、標準学力検査のことであり、全国基準に照らした相対評価法による検査である。ペーパーテストの点数により、5段階で評価される。

### 3. 授業実践の全体概要

実証的に検討した授業を表1に示す。

表1 実践した内容

	単元名など	手立て	分析・考察
実践1	2年生 Lesson3 The Ogasawara Islands	・4つの授業改善ポイント ・「Small Talk」	○興味・関心の高まり △コミュニケーション力の向上?
実践2	3年生 Lesson6 I Have a Dream	・4つの授業改善ポイント ・「Small Talk」会話モデル提示 ・家庭学習促進	○興味・関心の高まり ○自主的に英語に関わる内容 △コミュニケーション力の向上?
実践3	3年生 帯活動「Small Talk」 Project①「AIと英語しよう」 ②「留学生と交流しよう」	・4つの授業改善ポイント ・「Small Talk」会話の型を提示 ・Tips for communication ・「ルーブリック」	○興味・関心の高まり ○コミュニケーション力の向上

#### (1) 授業実践1：2年生 (H30)

L3 The Ogasawara Islands

##### ① 実践した手立て

導出した4つの授業改善ポイント「身近な題材(リアル感)」「活動内容選択の自由度」「ペア活動やグループ活動を通した学びに向かう力、学び合い」「言語活動時間の確保」を取り入れた授業実践を試みた。また、単元を通して行う言語活動として、「Small Talk」を行った。

##### ② 考察

授業後に行った生徒のアンケート記述には、「英語で会話をするのが楽しくなった。」「文法の要点を自分で自由に分かりやすくまとめることは、とても楽しく、これからも続けていきたい。」「グループ活動で、分からないことも分かるようになるし、どんどん英語が分かるようになって、英語が好きになった。これからはっきり英語の勉強をする。」等の記述があり、四つの授業改善ポイントが、英語への興味・関心を高める手立てとなったことを確認した。

しかし、コミュニケーション力の向上に結びつくと考えている言語活動「Small Talk」では、会話を継続する手立てを講じる必要がある。また、新学習指導要領で求められている力を育成するには、授業時間だけでなく、家庭学習を促す必要があるという課題を見出した。

#### (2) 授業実践2：3年生

L6 I Have a Dream (H30)

##### ① 実践した手立て

授業実践1で有効性を確認できた四つの授業改善ポイントを継続して行った。さらに、課題として出てきた「Small Talkで会話を継続すること」と「家庭学習へのアプローチ」の手立てを取り入れて授業実践2を行った。「Small Talk」で会話を継続する手立ては、教員と代表生徒による会話モデルを示したことである。ま

た、「家庭学習へのアプローチ」は、授業内容を家庭学習に結びつける試みとして、「Small Talk」のトピックで、自分について英作文を書くことを宿題として位置付けたことや、授業の振り返り用紙に「家庭学習内容と時間」を記入する項目を付け加え、授業の終わりに、自主学習内容の参考を示したことである。最終的な目標としては、授業で行ったことが英語への興味・関心につながり、自主学習や日常生活の中で英語に触れる時間が増えることを意図した。

##### ② 考察

授業実践2では、英語への興味・関心が高まったかについて、数値的な結果が得られるように、同じアンケート内容を授業前と後で行った。「英語の学習は好きです。」の結果では、全体的に肯定的な回答をする生徒が増え、半数以上の51.4% (35名中18名)の生徒が最高値4(あてはまる)と答えている。数値的にも、英語への興味・関心を観て取ることができた。

「Small Talk」で、会話継続の手立てとして行った教員と生徒による会話モデルの提示は、十分な手立てとならなかった。提示した会話モデルは、教員と指名された生徒1名で会話した内容を板書したものであり、必ずしも、生徒の表現したいことと合っているわけではなく、参考にしにくかったことが原因であると分析した。会話ができるようになる足場かけの一つとして、会話モデルは有効であると思うが、会話モデルの内容や示し方について、改善の検討が必要である。

「家庭学習へのアプローチ」の手立てである、「Small Talk」のトピックで英作文する宿題は、全部で6回行い、77.7% (36名中28名)の生徒が毎回提出をすることができ、一度も提出しなかった生徒はいなかった。また、「一週間に、学習以外で自主的に英語に関わった時間」のアンケート結果では、2時間以上の回答が8.8%から14.7%になるなど全体的に増加した。生徒が行った内容を図2に示す。下線部は、授業後に新たに出てきた内容である。

学習以外で自主的に英語に関わった内容 (下線は授業実践後に新たに記述された内容)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・洋楽を聴く</li> <li>・母と英語で会話</li> <li>・英語しぼりタイム設定</li> <li>・英語でニュースを聴く</li> <li>・日本語字幕で映画鑑賞</li> <li>・NHK 基礎英語を聴く</li> <li>・テレビで英会話を聴く</li> <li>・インターネットで海外の人とコミュニケーションをとる</li> <li>・You Tube で英語の動画を観る</li> <li>・You Tube でリスニング</li> <li>・英語新聞を見る</li> <li>・身近な人とふざけて英語で会話</li> <li>・海外のサッカー試合中継を英語で聞く</li> <li>・英語を使ったアプリをする</li> </ul>

図2 学習以外で自主的に英語に関わった内容

子どもの生活環境の延長線上で、できることを工夫し、英語に接している行動から、自らの興味・関心に基づいて自主的に英語に関わっている姿が観て取れ、英語への興味・関心の高まりの姿がうかがえた。

- (3) 授業実践3：3年生 (R1.7)  
 Project①「ALTと会話をしよう」  
 Project②「留学生と交流しよう」

### ① 授業の構想

授業実践1と2で取り入れた四つの授業改善ポイントを継続して行った。また、コミュニケーション育成を目指して、「日々の帯活動 (Small Talk)」と「統合的な活動 (Project)」をメインの言語活動に組み込んだ授業実践を行った。

「Project」では、「ALTと会話をしよう」「留学生と会話をしよう」という二つの言語活動を設定した。「ALTと会話をしよう」は、生徒がALTと1対1で会話をするパフォーマンス・テストであり、実践的な場面で、英語でコミュニケーションをする貴重な経験になると考えた。「留学生と交流しよう」は、英語を第二言語とする留学生に来校してもらい、各グループで交流を行った。英語は、ネイティブの人とコミュニケーションをするための道具ではなく、英語が第二言語の人も含め、世界中の多くの人とコミュニケーションをするための道具であることを生徒自身が実感することを意図した。授業参加の協力を得た留学生は以下の通りである。

・アイシェ (トルコ) 女	・バゲン (中国) 男
・シンニ (台湾) 女	・マニュエル (キューバ) 男
・ユーウェン (台湾) 女	・ソロモン (ナイジェリア) 男

### ② 手立て

「Small Talk」は、提示された話題についてペアで英語を使って会話をする「やり取り (interaction)」のコミュニケーション活動である。「やり取り」では、相手への配慮がコミュニケーションを図る大切な要素の一つである。そのため、「Tips for communication」(以下TfC)とする)の使用を重要な手立てとして位置付けた。「TfC」は、本研究で「つなぎ言葉」や「あいづち」「コミュニケーション・ストラテジー」を表す総称として使用する。Jack. C. Richards (2015) は、話すやり取りには、small talk, casual conversations, telephone conversations, transactions, discussions, interviews, meetings, debates,

presentations のジャンルがあると述べている。筆者は「Small Talk」のジャンルとして「会話の型」(図3)を提示し、会話を継続する手立てとした。

さらに、目指すべき具体的な姿や現在の自分の状態を生徒自身が理解し、明確な目的を意識して、主体的、積極的にコミュニケーション活動に取り組めるように、「ルーブリック」(図4)の使用を重要な手立てとして位置付けた。

Let's talk with ALT (会話の型)	
ALT	あなた
What season do you like the best?	準備した回答 (prepared A)
即興の質問 (impromptu Q)	即興の回答 (impromptu A)
即興の回答 (impromptu A)	By the way 準備した質問 (prepared Q)
	リアクション(reaction)/即興の質問(impromptu Q)

図3 会話の型「ALTと会話をしよう」

点数	応答	質問・リアクション	ボーナス (2点)
4	2回の応答場面で、スムーズに2文以上で応答している。相手の質問に関連した内容で、応答している。	2回の質問場面で、スムーズに質問をしている。相手の応答に関連した内容で質問をしている。	以下の観点について、よかった生徒にプラス1点、または2点する。
3	2回の応答場面で、1文で応答している。相手の質問に関連した内容で応答している。/1回は2文以上で応答しているが、1回は1文で応答している。	2回の質問場面で、質問またはリアクションをして、会話を継続しようとしている。	【観点】 ・Tips for communication (あいづち、つなぎ言葉等)を使用し、会話を豊かにしている。
2	相手の質問に1文以上で応答している時もあるが、単語レベルで応答している時もある。/1回だけ1文で応答している。	1回は相手に質問をしているが、単語レベルでの質問もある。/1回だけ1文で質問している。	・相手意識があり、相手が聞き取りやすい声の大きさ、アイコンタクト、表情、ジェスチャーを工夫している。
1	英文になっていないが、相手の質問に何とか応答しようと、単語やジェスチャーで伝えようとしている。	質問文にはなっていないが、何とか質問しようと、単語やジェスチャーで伝えようとしている。	

図4 ルーブリック「ALTと会話をしよう」

### ③ 授業の分析

手立てや活動の有効性を確認するために、二つの「Project」実践後に、生徒にアンケートを行った。

#### 【「ALTと会話をしよう」について】

「ALTとの会話を楽しめた」と「ルーブリックは役立った」に対しては88.9%(118名中105名)の生徒が肯定的な評価(4または3と回答)であった。「“TfCを使うよさを感じた”」は94.8%(118名中112名)の生徒が肯定的な評価であった。これらの結果から、手立てや活動の有効性を確認することができた。

また、ALTと生徒の会話内容から、コミュニケーション力の向上を観て取れた。Aさんは、NRT2で英語が苦手な生徒である。しかし、多少の文法的な間違いはあるものの、会話の型にそって、事前準備と即興部分の両方とも十分意味の伝わる発話をしていた。そして、「TfC」を使い、驚きや共感を示し、会話を円滑に進めた。

ループリックに沿った配点では、10点満点を得ることができた。Aさんの振り返りには、「家で段階を順に練習できた。“Tfc”は色々なあいづちやつなぎ言葉が載っているの、質問が思いつかないとき等、臨機応変に回答できた。緊張してもしっかり話せるようになった。」と記述され、ループリックを参考にして家で段階を踏んで練習したことや、“Tfc”を積極的に取り入れようとしていることがうかがえた。

#### 【「留学生と交流しよう」について】

「留学生との交流を楽しめた」は全員(63名)が肯定的評価であった。「留学生と交流しよう」活動後の生徒の自由記述には、「好きな食べ物や漫画が知れてよかった。」「“Me, too.”と言って手をつなげたのは、とてもよい経験になった。」等、英語を使うことを楽しただけでなく、英語は、色々な外国の人とコミュニケーションをとるための有効な道具であることや、コミュニケーションをしようという気持ちをもつことが最も大事であると実感したことがうかがえた。特に「英語は世界各国の人々と通じることができる魔法の言葉だと思った。」の感想には、私自身、感無量であった。

#### 4 実践内容と先行研究(理論)の関係から分かること

和田(2019)は、動機づけ研究の世界的権威ゾルダン・ドルニエイが体系化したモチベーション・ストラテジー(以下MSとする)の各段階において、効果を引き出すための条件をいくつかに焦点化して紹介している。表2は、これらの内容と、筆者の実践を照合したものである。

表2 MSと筆者の実践の照合

	MS(モチベーション・ストラテジー)	図1に示した筆者の授業デザインと実践内容
①意欲を引き出す基本的環境設定	・適切な教師の振る舞い ・安心で支持的なクラスムードの構築	振り返り用紙を通じた信頼関係の構築 ペア活動やグループ活動を通じた学びに向かう力、学び合い
①意欲を喚起する段階	・成功期待を高める ・生徒の自己関連性を引き出す	モデル、ループリックの提示 身近な題材、リアル感
②意欲を維持する段階	・興味をそそるタスクを提示する。	Small Talk Project(留学生との交流、ALTとの会話)
	・協同を促す	Project(留学生との交流)
	・自律を促す	課題選択の自由度 ループリックの提示
③意欲を発展させる段階(ポジティブな自己イメージの促進)	・努力要因に着目したフィードバック ・ポジティブな情報フィードバック	(振り返り用紙を通じたコメント) (振り返り用紙を通じたコメント)

筆者の実践をMSに照合すると、焦点化すべき内容のほとんどを網羅しており、理論的にも一致していることが確認できた。しかし、生徒の力をつけるための有効なフィードバックのあり方については、検討する必要がある。

#### 5 研究の結論

「英語への興味・関心を高め、コミュニケーション力を育む授業デザイン」は、図1で示したように、「英語への興味・関心を高める中で、『実際のコミュニケーションを意識した活動』を行うことにより、コミュニケーション力を高めること」ができる。「英語は魔法の言葉だと思った」と生徒の感想にあったように、英語は、多くの人とコミュニケーションをとるための道具であり、とても有効なものであることを生徒自身が実感し、外国人と積極的に関わる生徒を育成することが大切である。そのためには、授業デザインの中心である、日々の帯活動で行う「Small Talk」と実践的コミュニケーションの場である「Project」を往還しながら、生徒が英語を活用する場面を確保することである。また、英語を活用する場面の確保だけでなく、英語を活用できるようになる手立てとして、“Tfc”や「会話の型」「ループリック」が有効である。さらに、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする生徒を育成するには、生徒の英語への興味・関心という情意面は欠かせないものであり、日々の授業の中で、四つの授業改善ポイントを取り入れることは、生徒の英語への興味・関心を喚起するのに有効である。

#### 6 今後の展望

研究を通して、コミュニケーション力を育成するために最も大切な資質だと感じたことは、「積極的、主体的に英語を活用してコミュニケーションを図ろうとする姿勢」である。本研究で得た成果を継続して行い、外国人と積極的に関わる生徒を育成していきたい。また、英語への興味・関心を高め、維持するだけでなく、発展させる段階があり、そのために有効なフィードバックの重要性がみえてきた。今後は、有効なフィードバックについて強化していきたい。

#### 【引用・参考文献】

Jack. C. Richards. *KEY ISSUES IN LANGUAGE TEACHING*: Cambridge University Press, 2015  
文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』和田玲「生徒のモチベーションを高める英語指導ストラテジー——モチベーション・ストラテジーの理論と実践」、『英語の先生応援マガジン』2019 Winter 8-13頁